アフターコロナ
―終の住処を想う―

余市医師会
余市協会病院

草野　満夫

先日、「シン・地方の時代～パンデミックで変わる四国の未来～」というNHKの番組を見た。ある調査によれば、新型コロナのパンデミックによって東京在住の20代のおよそ３割が地方移住の意識が高まっているということが紹介されていた。番組中には、近年、瀬戸内海に浮かぶ大三島に移住した世界的建築家の伊東豊雄氏、同じく高知県に移住した映画監督の安藤桃子氏、また、900名の社員をほぼ全員テレワークで勤務にしたサイボウズというIT会社社長の青野慶久氏（愛媛県今治市出身）らが紹介されていた。私は高校まで東京に暮らし、以降、大学入学から札幌、その後、旭川に18年、また東京に15年さらに釧路に４年、札幌に４年、福島１年、今、余市に来て２年目を迎える。まさに都会と地方を転々と、東京と地方を行ったり来たりした私にとっても、地域は違えど身近に感じる内容であった。

末っ子で、家業を継ぐ必要もないことから、医者になりたい、親元を離れたい、Boys be Ambitious!に憧れ、２浪の末北大に入ったのが50数年前、今年はちょうど卒後50年目にあたるが、残念なことにコロナ禍で祝賀同期会は延期となった。

東京生まれ東京育ちの友人たちからすれば、札幌は地方である。高校の仲間からは、酒が入ると「都落ち」と揶揄され、友ならではの冗談と思っても、あまりいい気がしなかった。大学に入学し札幌での学生生活が始まり最初に気になったのは、冬は雪のせいでクラブ活動のサッカーができなくなること、方言というほどのことではないが、やや語尾の重たさを感じたことくらい、それが気になったくらいであとのことは気にならなかった。しかし、当然だが、年々、身体は北海道の気候に徐々に影響を受け、この地の気候に風土に順化していった。

クラブ活動のサッカーで東日本医科学生総合体育大会に出場した時の話である。開催地は横浜だった。技術以上に暑さ対策が勝負を左右するということで、大会前に東京で合宿を行うことになった。経費を抑えるため、朝霞（埼玉県）の自衛隊に体験入隊しようということになった。６時に起床し、点呼を受け、迷彩色の自衛隊ユニフォームを着て整列行進して、国旗掲揚し敬礼してからの練習だった。この暑さ対策が功を奏し、その年は準決勝まで進んだ。旭川には18年赴任したが、そこでも冬場のエピソードのみが都会との違いを感じさせるものであった。飲み屋を３軒はしごすると適度に酔いが覚めることも経験した。

札幌からみると余市は地方の田舎である。毎日の通勤に塩谷、蘭島の海岸通りを走るバスを利用している。いつも座れるこの路線バスに乗り、車窓から日本海を眺めながらの通勤はなんとも言えない爽快感がある。海岸線をさらに北西に走ると美しい海と岬のある古平、積丹があり、思い立ったら日帰りでも気楽に出かけられる。

コロナ騒動で“３密”を避けることになったが、地方には自然とsocial distanceが保てる適切な「まばらさ」がある。つまり「適疎」ということになるが、これがいい。そして、地方には「寛容さ」がある。時に過酷で人命を奪うほどに厳しく、時におおらかに優しく、そして豊かな実りをもたらし暮らしを支える糧を与えてくれる自然。そんな北海道の自然は人間に「寛容さ」という知恵をもたらしてくれる。自然に学ぶとは、生命が本来持つ「寛容さ」という最高のインテリジェンスを身につけることなのだろう。

昨年夏に続き今年の初夏にも、初老の男性が私の外来にやってきた。すでに仕事は引退しているという彼は、普段は東京在住で、毎年６月から10月までの数ヵ月、若い頃住んでいた忍路の家に住み、好きな庭仕事をエンジョイするというhybridな過ごし方をしているそうだ。暑い東京を脱出し涼夏を北海道で過ごすというおすすめのライフスタイルだ。

コロナ禍で多くの試練を課せられているが、IT化が進みテレワークが可能になり、地方にいても都会と同様に仕事ができることが分かってきた。それが地方のよさの再発見につながっている。医療の領域では地方では都会と比べギャップはあるものの、遠隔医療、ON LINEなどを充実させ、地方と都会の医療機関のネットワークの構築をさらに進めることでそれを十分にカバーできると考えられる。肝再生が大学での研究テーマであったが、見事に蘇る再生肝のように、コロナ禍で起きたさまざまな新しい挑戦が、今後の地方再生につながることを期待したい。

東京と北海道とを行ったり来たりのHybridな生き方をしてきた私は今、後志地方の良さを再認識している。終の住処は？と問われたら、迷わず北海道と答えたい。

国道５号沿いの蘭島海岸